『エフライムのレヴィ人』における立法者

Le législateur dans *Le Lévite d'Éphraïm* de Jean-Jacques Rousseau

前之園　春奈

要　　旨

ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）の『エフライムのレヴィ人』（1762）は旧約聖書の『士師記』の翻案である。作品の前半に登場するレヴィ人は『社会契約論』（1762）で論じられている立法者のモデルのひとつとして描かれていると考えられる。ルソーは『社会契約論』で立法者は共同体における例外的存在であると述べているが，レヴィ人もまたイスラエル民族の中で特殊な存在であった。このことを手がかりにして，レヴィ人が立法者としての資質を備えており，作品中では立法者としての役割を果たしていたということを明らかにした。

キーワード

『エフライムのレヴィ人』，『社会契約論』，レヴィ族，立法者，ルソー

本稿では，ジャン＝ジャック・ルソー（1712-1778）の小散文詩『エフライムのレヴィ人』（1762）に登場するレヴィ人が，『社会契約論』（1762）で論じられている立法者のモデルのひとつとして描かれているのではないかという仮説を立てそれを検証する。

『エフライムのレヴィ人』は，旧約聖書の『士師記』19～21章の翻案である。突然の不幸に襲われ，無実の罪に問われるレヴィ人は，作品執筆当時，逃亡生活を送っていたルソーの姿と重なる。このことから『エフライムのレヴィ人』をルソーの自伝的作品として読むことが出来る。一方で，

この作品は部族間の闘争から和解，統一へ至る過程を描いた政治的作品でもある。妻を殺された男がその遺体を切断し，イスラエルの12部族へ送る。驚いた人々は一堂に会し男を尋問する。彼の話で妻を死に至らせたのがベニヤミン族であることがわかると，その場でベニヤミン族への報復攻撃が決定される。こうして部族間での殺戮と略奪が開始され，イスラエルは異常事態となる。『士師記』には「イスラエルの人々がエジプトの地から上って来た日から今日に至るまで，このようなことは決して起こらず，目にしたこともなかった」[1] とある。ひとりの男の告発がイスラエル全土を揺るがす戦争の引き金となったわけである。しかし後述するように，この男の属するレヴィ族は，イスラエル民族であるものの戸籍にあたるものを持っていなかった。戸籍がなく固有の土地を持てない彼らは分散して他の部族の町に住んでいた。レヴィ族の人々はそれぞれの町の共同体にとってマージナルな人間であったことになる。

『社会契約論』第２編第７章でルソーは立法者について次のように述べている。

> 立法者はあらゆる点で，国家のなかの例外的な人間である。彼は，その天才によって例外的でなければならないが，その職務においてもやはりそうなのである。それは，行政機関でもなければ，主権でもない。共和国をつくるというこの職務は，つくられた国家組織のなかには入っていない。それは，特別で卓越した機能ではあるが，人間を支配することとはなんの共通点もない[2]。

彼によれば，立法者というものはその国の組織や制度に含まれず，いかなる権威や利害関係にも左右されない例外的人間でなければならない。レヴィ人はイスラエルにおける例外的人間であり，その人間の行為が契機と

なって民族統一へ至ったことから，レヴィ人はイスラエル建国に貢献した立法者であったと考えられるのではないだろうか。さらにルソーは立法者には確固たる意志と雄弁さが必要だとも述べているが，これらは全部族を招集し彼らを納得させたレヴィ人にも備わっていた天分であると言えるのではないだろうか。

本稿では，『エフライムのレヴィ人』を精読することによって，ルソーがレヴィ人をイスラエル建国の礎となった立法者として描いていたということを明らかにする。

レヴィ族とイスラエル12支族

エフライムのレヴィ人は作品前半の中心的人物として登場する。

ある時，エフライム山地に住むレヴィ人がベツレヘムを訪れユダ族の娘を見そめて連れ帰る。ふたりは共に暮らし始めるがしばらくして娘は親元へ帰ってしまう。レヴィ人は娘を迎えに行き娘の父親から結婚の承諾を得る。レヴィ人と，彼の妻となった娘はエフライムへの帰り道，ベニヤミン族の住むガバに立ち寄る。そこでひとりの老人と出会い歓待を受ける。夜になると町の若者たちが老人の家に押しかけ，レヴィ人を差し出すよう要求する[3)]。老人が自分の娘を身代わりに差し出そうとすると，レヴィ人は自分の妻を暴漢たちに引き渡す。彼女は乱暴され死んでしまう。レヴィ人はその遺体を持ち帰り12に切り分け，それをイスラエルの各部族へ送る。全部族が集合しレヴィ人を尋問する。レヴィ人は事件について語り，正しい判断を下すよう訴え力尽きる。人々は一致団結しガバを攻める誓いが立てられ戦いが始まる。ここまでが作品前半の粗筋となる。

山から下りてきたひとりの男が全部族を巻き込む戦争を引き起こす。ところがこの男はイスラエルの制度上では存在しない人間だった。

『エフライムのレヴィ人』というタイトルは，文字通りエフライムに住

んでいるレヴィ族の男を示している。ただし，エフライムに住んでいるといってもこの町はレヴィ族の所有する土地ではない。レヴィ族には「嗣業」，すなわち固有の土地が与えられていなかった。なぜなら神がモーセに「レヴィ族のみは，イスラエルの人々と共に登録したり，その人口調査をしたりしてはならない」[4] と命じたからである。記録がない，つまり戸籍のないレヴィ族は土地を持てない。そこで彼らは他の部族の町に散らばって住んでいた。レヴィ人が妻の遺体を12に分けて送った時も，登録されていないレヴィ族は送り先の12支族の中に含まれていなかった。神はまた，レヴィ族に祭祀にまつわる仕事をさせるよう命じた。そこで，自身もレヴィ族であるこの預言者の兄アロンの直系の子孫は代々祭司を務め，他のレヴィ族の者たちは祭司補佐をすることが定められた。レヴィ族は住んでいる町の聖所の管理をし，その謝礼によって生活していた。このようにレヴィ族はイスラエルにおける境界人，例外的人間であったと言える。

レヴィ人が例外的存在であることを意識してルソーが書いたと思われる箇所がある。それは，集まった人々の前で長老たちに尋問される場面にみつけられる。

> 彼は彼らに次のように言った。私は一夜を過ごそうと，妻と一緒に，ベニヤミンの町ガバに入りました。すると土地の者たちは，私の泊った家を取り囲み，私を侮辱し殺そうとしました。私は妻を彼らの乱行にゆだねざるをえませんでした。そして彼らの手からぬけ出るや，妻は死んだのです。そこで私は妻の体を運んで，それを切きざみ，それぞれの部族に送ったのです。主の民よ，私は真実を言いました。至高存在の前で正義と思われることを行ってください。
>
> その瞬間，イスラエル中に，ただ一つ叫び声が高鳴った。つんざくばかりの一致した声だった。若妻の血よ，殺害者どもの上に落ちよ。

永遠なる神よ万歳。ガバが滅ぼされぬかぎり，われわれは家に帰らない。われわれのだれ一人として，自分の屋根の下に帰らない。するとレヴィ人は大声で叫んだ。汚辱を罰し，無垢の血の仇を討つイスラエルよ，祝福されてあれ。ベトレヘムの娘よ，私はお前に良い知らせを持って行く。お前の思い出は名誉とともに残るだろう。こう言いおいて，彼はうつぶせに倒れ，死んでしまった。そのなきがらは国葬に付された。若妻の手足は集められ，同じ墓に納められた。そのためにイスラエル中が泣いた[5)]。

レヴィ人は，イスラエルの民の雄たけびを聞くと，ついに力尽きて死んでしまう。ところがこれはルソーの創作で，『士師記』ではレヴィ人の死については語られていない。レヴィ人の死は唐突に訪れるが，多少の不自然さをともなってもルソーには彼の死に関するエピソードを挿入する必然性があったのである。結果として，ルソーのレヴィ人には『士師記』には見られない立法者の内在的性質が新たに付与されることとなる。『社会契約論』で，理想的な立法者の例として，ルソーはリュクルゴスとその国に定住しない外国人を挙げている。リュクルゴスは王位を放棄し国を出ることで姿を消した人物で，外国人というものは帰国してその国から出ていく人間である。そしてレヴィ人の場合は死によって完全に共同体から姿を消した。くわえて，ルソーの翻案では，このようにレヴィ人は国葬され，回収された妻の遺骸も同じ墓に納められたことになっているが，これもまた聖書にはない記述である。国葬されるのは特別な人間だけである。さらに言えば，レヴィ人の妻の埋葬は，ばらばらだったイスラエルの部族がひとつにまとまった事のアレゴリーだろう。ルソーが粗筋にレヴィ人の死と国葬のエピソードを加えたのは，レヴィ人が規範外の存在であったことを印象付けるためであったとも考えられる。

ゆるぎない手つき

ガバの町でベニヤミンの若者たちの襲撃を受けた翌朝，レヴィ人は妻が戸口で死んでいるのを見つける。はじめは嘆き悲しむレヴィ人だったが，やがて彼に復讐心が芽生える[6)]。

> このときから，彼の心は唯一の計画によって占められ，彼は他のあらゆる感情に耳をかさなかった。愛情，後悔，憐み，彼にあってすべてが憤怒に変わった。それを見れば涙にくれるはずの体も，もはや彼を嘆かせることも泣かせることもできなかった。彼はそれを乾いた暗い目でながめていた。彼がそこに見出したものは，怒りと絶望の種だけであった。召使に助けられて，彼はそれを馬車に乗せ，自分の家に運んでいった。そこで迷いも震えもなく，彼は野蛮にもその体を十二に切り分けた。しっかりとしたゆるぎない手つきで，彼は恐怖心もなく打ちこみ，肉と骨を切り，頭と手足を分離した。これら恐ろしい贈物を部族に送ると，彼らに先んじてマスファに行き，衣服を裂き，頭に灰をかぶり，彼らがやって来るにつれて地にひれ伏し，大声でイスラエルの神の裁きを求めた[7)]。

レヴィ人の決意は固く，「迷いも震えもなく」，「しっかりとゆるぎない手つきで」作業を進めていく。レヴィ人からの「恐ろしい贈物」は言葉よりも強いメッセージとなった。ルソーはすでに『言語起源論』（1761頃）第一章で，思考の伝達手段の中で視覚に訴える方法は言葉よりも効果的であると主張している。「いちばん力に満ちた言語は，話をする前に，記号ですべてをいってしまう言語である」[8)] と言って例を挙げ，この遺体切断のエピソードも引いている[9)]。言葉を弄さずとも，見ただけで何か恐ろしい

事が起きたということだけは，受け取った相手に確実に伝わる。人々は駆けつけ，彼は全部族を招集することに成功する。しかし，このために彼はリスクを背負っている。人々はベニヤミン族の犯行を知らず，レヴィ人には遺体の切断だけではなく，妻殺害の嫌疑もかけられている。「羽音を立てながら集まる蜜蜂の群れ」[10] のように興奮している人々に向かって彼は語りかける。この時レヴィ人は，破れた服をまとい頭には灰をかぶっている。服を破く行為も灰をかぶる行為も，嘆きを表す行為として聖書でしばしば用いられる表現である。彼の悲しみはその姿を目にした者には伝わったであろう。彼の話から真相が明るみにされると，人々は怒りベニヤミン族への制裁を決定する。このようにしてレヴィ人の願いは達成される。ところで，このくだりを注意して読むと，レヴィ人は人々に向かって自分から「復讐してください」とは一言もいっていない。聖書の中のレヴィ人も復讐という言葉は使っていない。ルソー版では，レヴィ人はただ「至高存在の前で正義と思われることを行って下さい」と言っただけだった[11]。ベニヤミン族を討つことは人々が思いつき決定したことで，レヴィ人が命じた事ではない。固い決意と巧みな説得によってレヴィ人は悲願を成就させた。

ベニヤミン族の残虐な行為が発覚する以前のイスラエルをルソーはこう描写している。

> 神の民の上にだれも君臨しなかった自由の日々，法官も裁判官も認めず，だれも己のみを主人とし，自分が良いと思うことは何をしても許される時代があった。その頃イスラエルの民は，野に散らばっており，大きな町はわずかしか持たなかった。淳良な風俗は法の支配を無用にした。しかしすべての心がひとしく清らかであったわけではなく，悪人たちは美徳の加護のもとで，悪徳を罰せられないでいた[12]。

レヴィ人の告発によってイスラム民族が一堂に会し集会が開かれた。長老たちによって執り行われたレヴィ人への聴きとりは証人尋問と考えられる。そして復讐の決定は悪人を罰する法の制定である。レヴィ人はイスラエルに法制度をもたらしたと言えよう。

『社会契約論』には，立法者は「一つの人民に制度を与えようとあえて企てるほどの人は，いわば人間性を変えることができるという確信を持っていなければならない」[13] と書いている。レヴィ人には人々を動かせるという確信があった。彼はゆるぎない手つきで妻の遺体を切断した。彼は確信に満ちて行動し，人々はそれに動かされたのである。

レヴィ人の雄弁さ

イスラエルの民がレヴィ人の妻の復讐を決めたのは，レヴィ人の語りが，その声が人々の心に届いたからであろう。それでは大衆を動かす言葉とはどのようなものだろうか。

ルソーは『社会契約論』で，立法者が抱える困難のひとつとして言語の問題を挙げている。まず，立法者には「すぐれた知性」と「崇高な理性」が必要とされる[14]。

> それぞれの国民に適した最良の社会規範を発見するためには，すぐれた知性が必要である。その知性は，人間のあらゆる情念をよく知っているのに，そのいずれにも動かされず，われわれの性質とまったく似ていないのに，それを底まで知りつくし，自分の幸福はわれわれとはかかわりがないのに，しかもわれわれの幸福のために喜んで心をくだき，なお最後に，進みゆく時のかなたに遠く栄光を展望しながら，ある世紀において苦労し，別の世紀においてその成果を享受することのできる，そういう知性でなければならないだろう[15]。

すぐれた知性を持つ立法者には，何が共同体にとっての幸福かがわかっている。それを人々に説いて，その幸福の実現のためにふさわしい法を制定するように導くのが立法者の役割である。しかし，一般大衆にとって，ずば抜けた知性を持つ立法者の言葉は難解すぎる。くわえて身近でないあまりに壮大な目標や，あまりに複雑な事柄を語られても，それはもう彼らの理解の範囲を超えてしまうだろう。そこで，立法者は「力も理屈も用いる事ができないので，暴力を用いることなしに誘導し，説き伏せなくても納得させられるように」[16] 語らなくてはならない。

『社会契約論』で，立法者の言語の問題について述べているところでは「このような崇高な理性は，一般大衆の理解の範囲を越えた高さにある。この理性の決定を神々の口から語らせることにより，人間の思慮分別に訴えることでは動かしえない人々を，神の権威によって誘導するのである」[17] と，ルソーは最終的に神の権威を持ちだしている。『エフライムのレヴィ人』では，これが聖書を下敷きにした物語であるからこそ，レヴィ人の立法者としての役割が自然にうまく機能しているように思われる。

ここであらためてイスラエルの民へ対してレヴィ人の発揮した「雄弁」の性質について確認してみよう。ルソーの物語では，レヴィ人は言葉を越えた自明性を体現する存在として描かれている。まずレヴィ人の送った妻の遺体は，その物質的な直接性からどれだけ言葉を重ねるよりも出来事の残酷さが伝わる。また，服を破き灰をかぶったレヴィ人の姿も，旧約聖書の文脈を踏まえれば，それが大きな悲しみを表しているのだということが直ちに理解される。さらに特徴的なのは，レヴィ人自身の容姿である。聖書にレヴィ人の容姿に関する描写はないが，ルソーは「レヴィ人は若く美しかった」[18] と書いている。レヴィ人を襲ってきたベニヤミンの男たちも，レヴィ人の「美しさ」に目をつけていた。ルソーは，余計な描写をせずにレヴィ人を「美しい」と断言することで，言葉による推論を越えた直接的

な美をレヴィ人に体現させているのである。レヴィ人は，物質的証拠を陪審員の前に提示して，審判をあおぐのである。「主の民よ，私は真実を言いました。至高存在のまえで正義と思われることを行ってください。」レヴィ人はこう言って告白を終えている。彼は神を証人にすることで潔白であることを証明する。ついで，尋問されていた彼の方から，神の監視のもとで，あなたがたにとっての正義は何かと問いを発している。神の前で下された判断は神聖な侵すことのできない約束となるだろう。このようにしてレヴィ人は，暴力も用いず，無理強いもせず，イスラエルの民に法をつくらせたのだ。レヴィ人の雄弁は立法者の雄弁である。

ルソーの描いたレヴィ人は，立法者に必要な毅然とした態度，雄弁さを備えており，その出自は制度の枠を超えたところにある。この例外的人間はリュクルゴスをはじめとしたルソーにおける立法者のモデルのひとつとみなすことが可能であろう。

加えられたエピソード

『エフライムのレヴィ人』にレヴィ人が登場するのは前半までである。作品後半ではイスラエル軍とベニヤミン軍の戦いと，敗れたベニヤミン族の再生が語られている。戦いは三日にわたり，はじめは優勢だったベニヤミン軍は敗れ600人の男たちしか生き残らなかった。イスラエルの人々は部族のひとつが消滅するのを案じたが，彼らは戦の前の集会で「自分たちの娘を嫁としてベニヤミンの男には与えない」と誓っていた。そこで一計を講じ，不参戦だったヤベシギレアデの住民を，処女400人を除いて懲罰として皆殺し，その娘たちをベニヤミンの男たちに与えた。しかしまだ200人分の娘が足りない。長老たちは話し合い，シロの祭に来る娘たちから気にいった者を捕まえて連れ帰るようベニヤミンの男たちに言う。そこでベニヤミン族の男たちは祭に来た娘たちをさらって帰った。以上が『士

師記』で語られていることである。ルソーはこれに新たなエピソードを加えた。

祭でベニヤミン族の男たちに囲まれ，シロの娘たちは逃げようとする。その中にアクサという娘がいた。彼女には許婚がおり，他の娘と一緒に逃げようとする。そこへアクサの父親が現われる。この父親こそベニヤミン族に娘たちを拉致するよう勧めた長老だった。父親はアクサに，部族の救済と父親の名誉のために，娘として務めを果たすよう説得する。アクサは父親の願いを聞き入れ，自ら犠牲となり，追ってきたベニヤミン族の男の腕の中にくずれ落ちる。他の娘たちもそれに倣いベニヤミンの男たちに身をまかせる。この情景は見る者の心を打ち，人々から歓声が上がる。

アクサのエピソードを加えたことで，結末部分の言葉が，ルソーの作品と『士師記』で大きく異なっている。

『士師記』19章は「イスラエルに王がいなかったそのころ，エフライムの山地の奥に一人のレビ人が滞在していた」という書き出しで始まり，21章の「そのころ，イスラエルには王がいなく，それぞれ自分の目に正しいと思うことを行っていた」という文で終わっている。「イスラエルに王はいない」という表現の反復からも，物語が円環している印象を受ける[19)]。また，この結びの文は，『士師記』の中で何度か使われていた。イスラエルの初代王サウルが現われるまでは王不在の時代で，争い事がくり返されていたのである。『エフライムのレヴィ人』では物語の冒頭部分に，この結びの文に対応する文章が現われる。「神の上にだれも君臨しなかった自由の日々，法官も裁判官も認めず，だれも己のみを主人とし，自分が良いと思うことは何をしても許される時代があった。」[20)]『士師記』の結びの文章と比較すると，「王」ではなく「法官・裁判官」，「自分」ではなく「己の主人」という言葉が使われており，『社会契約論』や『人間不平等起源論』（1755）における議論を連想させる。そして，『エフライムのレヴィ人』

の結末では，『士師記』の円環構造が放棄されている。「エフライムの処女たちよ，お前たちのおかげで，ベニヤミン族はいまにもよみがえろうとしている。われわれの先祖の神よ，祝福されてあれ。イスラエルにまだ徳があったのだ。」[21] 確かにイスラエルにはまだ王は登場しない。しかしレヴィ人の働きによりイスラエルには法が成立した。物語冒頭の表現を用いれば，「法官」と「裁判官」が機能を始める準備が整ったのである。ルソーの物語では，立法者が略奪の過去を断ち切り，イスラエルには秩序がもたらされるのである。

最後に，アクサのエピソードには留意すべき点がある。それは，ベニヤミンの男のもとへ行ってくれるようにと，父親がアクサを説得する場面にみられる。うなだれていたアクサが顔をあげると父親と目が合う。「父親の眼は口よりも多くを語っていた。彼女は決断した。」[22] 父親の「雄弁」がアクサの決断を後押ししている。強制せずに説得するのが立法者の雄弁だが，アクサの父親は雄弁を自分の都合で利用している。『エフライムのレヴィ人』はこのアクサのエピソードによって負の円環運動を止めている。それは，アクサをはじめとするシロの娘たちが，自らの意志でベニヤミンの男たちのもとへ行くことで，男たちの連れ去り行為が略奪ではなく合意になるからだ。これは長老たちが「ベニヤミンの男には娘を嫁がせない」という誓約を守る為に絞り出した苦肉の策である。このように法をかいくぐる手段にも雄弁は用いられる。それでは立法者の雄弁と詐欺師の雄弁はどのようにして見分けるのか，その違いは何であるのか。立法者の雄弁についてはさらに考察を重ねる必要があるだろう。

注

1） 聖書新共同訳，『士師記』19：30。
ルソーはこの部分を『エフライムのレヴィ人』第一の歌の冒頭と『言語

起源論』第一章で引用している。

2） *Du contrat social*, *Œuvres complètes, t. Ⅲ*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade p. 382.（以下 *OC* と略，日本語訳は白水社『ルソー全集』に従い，場合によって変更した。）

3） ベニヤミンの若者たちは宿主の老人にこう言った。「許しもなく城内に連れ込んだ，その若い他国者を，わしらに引き渡せ。そいつの美しさでもって，宿代を払ってもらおう。傲慢の報いを受けるがいい。」，（*OC, Ⅱ*, p. 1214）この老人もエフライム出身でしばらく前からガバの町で暮らし始めていた。

4） 聖書新共同訳，『民数記』１：49。

5） *Le Lévite d'Ephraïm*, *OC, Ⅱ*, p. 1216.

6） *Ibid.,* p. 1215「以後彼はただ妻の仇をうつためだけに，生きながらえたのだった。」

7） *Ibid.,* pp. 1215-1216.

8） *Essaie sur l'origine des langues, OC Ⅴ*, p. 377.

9） *OC Ⅴ*, p. 377.「エフライムのレヴィ人が妻の死に復讐をしようとしたとき，彼はイスラエルの部族に一言も書きおくりはしなかった。彼は死体を十二の部分にわかち，それを送った。その恐ろしいありさまを見て，イスラエルの民は武器を取りいっせいにこう叫んだ。「われらの祖先がエジプトを出たときから今日にいたるまで，こんなことは一度としてイスラエルに起きたことはなかった。」そしてベニヤミンは皆殺しにされたのである。」

10） *OC*, *Ⅱ*, p. 1216.

11） 聖書には「あなたたちイスラエルのすべての人々よ。ここで話しあって協議していただきたい」とある。聖書新共同訳『士師記』20：７。

12） *OC*, *Ⅱ*, pp. 1208-1209.

13） *Du contrat social*, *OC*, *Ⅲ*, p. 381.

14） *Ibid.*, p. 381, p. 383.

15） *Ibid.*, p. 381.

16） *Ibid.*, *OC*, *Ⅲ*, p. 383.

17） *OC*, *Ⅲ*, pp. 383-384.

18） *OC*, *Ⅱ*, p. 1209.

19） 聖書新共同訳，『士師記』19：1, 21: 25。

20） *OC, Ⅱ*, p. 1209.

21） *Ibid.*, p. 1223.

22） *Ibid.*, p. 1223.